連載

ジョン・アダムス：
フラワリング・ツリー
❁
花咲く木
— 3 —

花咲く木

山下博司（東北大学教授・環境思想学者） HIROSHI YAMASHITA
岡光信子（文化人類学者） NOBUKO OKAMITSU

「花咲く木」は、南インド・カルナータカ地方で採話された物語である。原語はカンナダ語（カルナータカ州の公用語）。物語の舞台となっているカルナータカ州は、「インドのシリコンバレー」と呼ばれるバンガロール市をもちIT産業で活況を呈するとともに、豊かな自然に恵まれ、農業も盛んである。「花咲く木」は、同じ州出身の詩人・文学者A・K・ラーマーヌジャン（1929〜1993）が出版したインド民話集から採ったものである。ラーマーヌジャンは同州のマイソール大学で英文学の修士号をとり、インドの大学で教師をしていたとき民話の採集をはじめた。その後米国インディアナ大学に移り学位を得たあと、シカゴ大学で30年間にわたってインドの文化や文学を講じ、多くの研究者を育てた。功績が認められ、インド政府から「文化功労者」にも当たる賞を贈られている。彼は最晩年に、自らの学問の原点である「民話」に立ち返り、すぐれた解説を施した説話集を刊行した。印象的な物語「花咲く木」はそのなかに収められている。

この物語を読み解く鍵は、「花」「木」「女性」、そして「水」である。

女主人公・クムダとは、サンスクリット語で「夜に咲く睡蓮」「月の光に咲く睡蓮」を意味する。その名からも、彼女自身、人知れず咲く花のイメージに包まれていることがわかる。

インドには、ブーゲンビリアをはじめ花を咲かせる高木が多い。常夏の気候なので、年じゅう鮮やかな色の花を咲かせている。匂いもかぐわしい。物語のなかで花の色への言及はないが、芳香を放っていることは容易に想像がつく。

インドの日常は花であふれている。女性たちは毎朝ジャスミンの花を糸でつないだもので黒髪を飾る。しかし花は単に身を飾るための道具ではない。神に捧げたり神像の装いに用いたりもする。花は、敬虔な信仰心を神に運んでくれる使者なのである。ヒンドゥーのお寺の前には花屋がたくさん店を構えている。路上にござを広げて売っている場合もあれば、この物語のように行商して売り歩くこともある。花を売る女たちの身分は概して低い。

花は同時に、女性が体内に宿す豊饒な力の象徴でもある。女性の成熟は植物になぞらえられ、初潮は開花にも喩えられる。プシュパ、つまり「花」という名の女性も多い。女性の麗しさをたたえ、子孫繁栄の願いをこめて付けられる名前である。結婚式では、花嫁は花の色にも経血にも通じる赤いサリーを身につける。逆に、夫を亡くした女性は髪につけた花を取り、終生白いサリーを着て過ごす。女性の多産の力は夫の存在によって保障される。だから未亡人は色のついたサリーを着ることができないのである。

このように「花」は、宗教性にも豊饒性にも裏打ちされたシンボリズムを内包している。

女主人公クムダは、木に変身し花を咲かせる秘密の力をもつ。彼女が大樹の根もとにすわり、ひたすら神に祈って壺の水を聖化し、その水を身体にかけると、たちまち巨木に変容を遂げる。女性の生産的な力を表す神秘の樹木である。インドの水壺は、脇に抱えて運びやすいよう、口の下が女性のウエストのようにくびれた形をしている。成熟した女性の体形に似ることから、壺は女性の象徴ともなる。だから壺の水は不可思議な生命力に満ち、少女を大人の女性——花々に覆われた樹木——に一変させることができるのである。

彼女が王子に嫁ぐことができたのは、美貌もさることながら、彼女のもつ稀有な豊饒の力のゆえである。結婚生活の幸せも、寝床の脇にうずたかく積もった花びらで象徴される。

幸福も長くは続かない。義妹の心ない行為によって人間とも樹木ともつかない姿になり果てたクムダは、大雨に打たれ排水溝を伝って、見知らぬ場所に流れつく。インドにも、世界が破局を迎えたとき大洪水が起こるという伝説がある。水は命を育む一方で、すべてを壊し呑み込むという両義的な力をもつ。しかし水が、登場人物の境遇を一変させ、物語を動かす力であることに変わりはない。漂着したところでクムダに新しい運命がひらける。

この間、妻を失った王子は失望のあまり宮殿を去り、苦行者となって彷徨する。一方、クムダの無惨な姿は、その地の王室に嫁いだ義姉の目にとまる。義姉は半信半疑で手当を施すが、治癒にはおぼつかない。そうした折、王子は別人のように憔悴して村々をさまよううち、姉の領内に迷い込む。彼を弟と気づいた姉により、夫婦の再会が果たされる。ここでも、二人の間を取りもち、もとの姿を回復してくれるのは、水の超自然的な威力である。

インドには、この物語のように人間以外の生きものが登場する民話が多い。鳥や獣があたかも人のように言葉を交わし機転を利かせる。人間と生きものとの垣根の低いのがインド的生命観の特色だが、植物までが心や魂をもって描かれる事例は少ない。カルナータカ地方は、ヒンドゥー教が興る以前、ジャイナ教が栄えた場所である。ジャイナ教は植物にも命を認める。一本の草木でもむやみに傷つけてはならないと教える。枝を折られ葉をむしりとられた樹木は、彼らにとっては、手足をもがれた人間にも等しい。カルナータカ地方では、このような生命観が文化や暮らしの基層に息づいている。人と木は姿が似ている。しかしこの物語では、樹木が人間の隠喩の役割を果たすだけでなく、樹木それ自体いたわるべき大切な命として扱われている。自然環境のかけがえのなさを教えているのである。

「花咲く木」は、インド的・アジア的な生命観、自然観、倫理観に裏打ちされた昔話だが、世界の民話や神話とも通底する普遍的な発想類型に拠っている。象徴的なレベルにおける死と再生、異なる生きもの同士の結婚（異類婚姻譚）、高貴な者の試練をともなう旅（貴種流離譚）、末子が成功する筋立て（末子成功譚）、身分違いの結婚（上昇婚（ハイパガミー））のモチーフなどがそれである。木に変貌する際、枝を折らないよう誓わせるシーンは、鶴に姿を変えている間、機屋（はたや）をのぞき見ないように釘を刺す「鶴の恩返し」の説話を思い出させる。変身は条件の遵守と引き替えになされる。それが守られないと、もとの状態を回復できず、異界にとどまるよう運命づけられてしまう。枝や葉をもぎとられたクムダが人間に戻れなくなったように、鶴も、そのときを最後に愛する夫のもとから去っていくのである。

「花咲く木」の話は、王子ジークフリートと、魔法により白鳥の女王に変えられたオデット姫の物語をも連想させる。このたびのオペラ『フラワリング・ツリー❁花咲く木』は、インドの民話を下敷きにして、モーツァルト作曲の歌劇『魔笛』にも着想を汲み構成されたものという。洋の東西を問わず人々の心に訴えかける深みと普遍性とをもった原話であるからこそ、文化や民族の違いを超えた試みを可能にしたと言うことができる。

第562回定期演奏会
2008年12月6日（土）6:00p.m. サントリーホール
5：15p.m.〜ピーター・セラーズ×岡部真一郎によるプレトーク
ジョン・アダムズ：
フラワリング・ツリー ❁ 花咲く木
（全2幕、日本初演、セミ・ステージ形式、英語上演、字幕付）
指揮：大友直人　演出：ピーター・セラーズ
クムダ：ジェシカ・リヴェラ（ソプラノ）／王子：ラッセル・トーマス（テノール）
語り部：ジョナサン・レマル（バス・バリトン）
舞踊：ルシニ・シディ／エコ・スプリヤント／アストリ・クスマ・ワルダニ
合唱：東響コーラス／合唱指揮：有村祐輔
S¥10,000　A¥8,000　B¥6,000　C¥5,000

ピーター・セラーズ講演会　2008年12月5日（金）18:30〜
明治学院大学白金校舎アートホール・入場無料
■主催：明治学院大学／日本アルバン・ベルク協会
■問 03-5421-5380（明治学院大学芸術学部共同研究室）